

花

袋

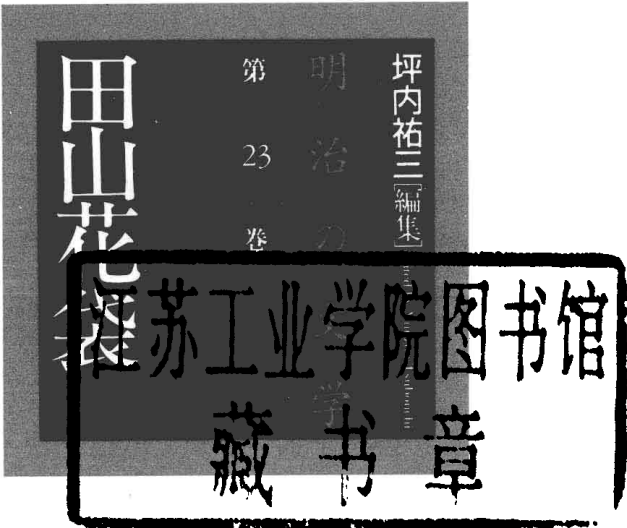
田山花袋

明治の文学
第23卷

坪内祐三編集 | edited by Yuzou Tsukiyoshi

筑摩書房

K a t a i T a y a m a



筑摩書房

明治の文学
第23巻 田山花袋

二〇〇一年五月二十日 初版第一刷発行

編者 坪内祐三 小谷野敦

発行者 菊池明郎

発行所 筑摩書房

東京都台東区蔵前二五二三 一―二―一八七五五
振替〇〇一六〇八一四二二三

印刷 明和印刷株式会社

製本 株式会社積信堂

ISBN4-480-10163-2 C0393 Printed in Japan

乱丁・落丁本の場合は、左記宛に御送付下さい。

送料小社負担でお取り替えいたします。

※注文・お問い合せも左記をお願いします。

〒三三二―八五〇七 さいたまま市権引町二六〇四

筑摩書房サービスセンター

電話〇四八―六五一―〇〇五三

初めて戀するやうな熱烈な情は無論なかつた。盲目に其運命に従ふと謂ふよりは、寧ろ冷かに其運命を批判した。熱い主觀の情と冷めたい客觀の批判とが絡り合せた糸のやうに固く結着けられて、一種異様の心の状態を呈した。

悲しい、實に痛切に悲しい。此悲哀は華やかな青春の悲哀でもなく、單に男女の戀の上の悲哀でもなく、人生の最奥に秘んで居るある大きな悲哀だ。行く水の流、開く花の凋落、此の自然の底に蟠れる抵抗すべからざる方に觸れては、人間ほど儂い情ないものはない。

目次

少女病	3
蒲団	25
縁	113
私のアンナ・マアル	417

解説—感傷的な作家の賭け—小谷野敦……………424

明治文学年表—坪内祐三……………432

田山花袋年譜……………436

同時代人の回想—田山さんの事—前田晁……………443

明治の文学

第23卷

田山花袋

全巻編集

坪内祐三

本巻編集・解説

小谷野敦

脚注

花崎真也・篠原紀子

脚注函版

林丈二・林節子

編集担当

松田哲夫（筑摩書房）

ブックデザイン

吉田篤弘・吉田浩美

少女病

—

山手線の朝の七時二十分の上り汽車が、代々木の電車停留場の崖下を地響させて通る頃、千駄谷の田畝をてく／＼と歩いて行く男がある。此男の通らぬことはいかな日にも無いので、雨の日には泥濘の深い田畝道に古い長靴を引ずつて行くし、風の吹く朝には帽子を阿弥陀に被つて塵埃を避けるやうにして通るし、沿道の家々の人は、遠くから其姿を見知つて、もうあの人を通つたから、貴郎御役所が遅くなり

- (1) まだ環状線ではなく、品川―新宿―赤羽および池袋間を走っていた。電化されたのは明治四二年。
- (2) ぬかるみ。
- (3) 阿弥陀仏の光背のように後ろにすらしてかぶつて。

ますなどと春眠しゅんみんいぎたなき主人しゅじんを揺ゆり起おこす軍人ぐんじんの妻君さいくんもある位くらゐ。

此男このをとこの姿すがたの此田畝道このたんぼみちに頭あたまれ出したのは、今から二月ふたつきほど前まへ、近郊きんこうの地ちが開ひらけて、

新しい家作かざくが彼方あつちの森もりの角かく、此方こつちの丘かみの上うへに出来上できあつて、某少将たがししょうの邸宅ていたく、某

会社重役かいしじやうやくの邸宅ていたくなどの大きな構かまへが、武蔵野むさしのの名残なごりの櫟くぬぎの大並木おほなみきの間あひだからちら／＼と

画ゑのやうに見える頃ころであつたが、其櫟そのくぬぎの並木なみきの彼方あつちに、貸家建かじやだての家屋かみやが五六軒並なる

であるといふから、何でも其処等そこごうに移転そうつして来た人だらうとの専らちゆうばの評判ひやうばん。

何なにも人間にんげんが通とほるのに、評判ひやうばんに立たてる程ほどのものは無いのだが、淋さびしい田舎いなかで人珍ひとめづ

しいのと、それに此男このをとこの姿すがたがいかにも特色とくしきがあつて、そして驚あわの歩くやうな變へんてこ

な形かたちをするので、何なにとも謂いへぬ不調和ふてうわ——その不調和ふてうわが道傍みちざうの人々ひとびとの閑ひまな眼めを惹ひ

の基もととなつた。

年としの頃ころ三十七八さんじちちやうぱち、猫脊ねこせで、獅子鼻ししなびなで、反齒そつばうで、色いろが浅黒あさくろくつて、領髯りやうひげが煩うるさうら

に顔かほの半面はんめんを蔽おほつて、鳥渡ちりやとこ見ると恐おそろしい容貌ようぼう、若い女よめなどは昼間出逢ひるまであつても気味きみ

悪わるく思おもふ程ほどだが、それにも似合にあはず、眼めには柔和じやうわなやさしいところがあつて、絶え

ず何物なにものをか見て憧あこがれて居ゐるかのやう。足あしのコンパスコンパスは思切おもひきつて広く、トットと小き

ざみに歩くその早はやさ！ 演習えんしゆに朝出あそでる兵隊へいたいさんもこれにはいつも三舎しゃを避よける。

大抵洋服たいていやうふくで、それもスコッチの毛けの摩すれてなくなつた鶯色うらぎいろの古脊ふるせ広ひろ、上うへにあほつ

たインパネスも羊羹色ようかんいろに黄きはんで、右みぎの手てには狗いぬの頭あたまのすぐ取とれる安ステッキやすステッキをつき、



図1

(1) 春の夜は短くて、なかなか目が覚めないで寝ていること。春眠しゅんみんを覚えず(春眠不覚)。

(2) 貸家かじや。

(3) 貸すことを目的に建てた家。安普請やすうらぐが多い。

(4) 前歯まへばがてていること。出っ歯でっば。

(5) 頬ほから頸くびにかけてのひげ。

(6) 歩幅ふく。

(7) 相手を恐れて避けること。

(8) 中国の左氏伝「おそれはばかりに三舎の外に退く」から。三舎さんしゃは約九〇キロメートル。

(9) スコッチランド、インパネス地方の男子用コート。袖そでなしで、身頃みごにケーブがついている。

(10) ステッキの頭に狗の頭型の彫刻がついている。

四ツ目垣の外を通懸ると、

「今お出懸けだ！」

と、田舎の角の植木屋の神さんが口の中で独語ちた。

其植木屋も新建の一軒屋、売物のひよる松やら樫やら黄楊やら八ツ手やらが其周囲にだらしなく植付られてあるが、其向ふには千駄谷の街道を有せる新開の屋敷町が参差として連つて、二階の硝子窓には朝日の光が閃々と輝き渡る。左は角笈の工場の幾棟、細い烟筒からはもう労働に取懸つた朝の烟がぐるく低く靡いて居る。晴れた空には林を越して電信柱が頭だけ見える。

男はてく／＼と歩いて行く。

田畝を越すと、二間幅の石ころ道、柴垣、樫垣、要垣、其絶間々々に硝子障子、冠木門、瓦斯燈と順序よく並んで居て、庭の松樹に霜よけの縄のまだ取られずに附いて居るの見える。一二町行くと、千駄ヶ谷の通で、毎朝、演習の兵隊が駆足で通つて行くのに邂逅する。西洋人の住める大きな洋館、新築の医者の構への大きい門、駄菓子を売る古い茅葺の家、此処まで来ると、もう代々木の停留場の高い線路が見えて、新宿あたりで、ポーと電笛の鳴る音でも耳に入ると、男は其の大きい體を先へのめらせて、見得も何も構はずに、一散に走るのが例だ。

今日も其処に来て耳を欻てたが、電車の来たやうな氣勢も無いので、同じ歩調ですたすたと歩いて行つたが、高い線路に突当つて曲る角で、ふと栗梅の縮緬の羽織



図 2

(11) 竹を縦横にあらく組んで四角の目にした垣。

(12) 不揃いなようす。

(13) 現・新宿区西新宿。

(14) バラ科の常緑木要齋(か)なめもちで造つた生け垣。



図 3

(15) 二本の柱を貫く横木のあり門。

(16) 石炭ガスを用いた街路灯。



図 4

(17) 栗極色。赤味のある栗色。

(18) 縮緬の着物。生糸を用いたしぼのあるどっしりした布地の着物。

をぞろりと着た恰好の好い、庇髪の女の後姿を見た。鶯色のリボン、繡珍の鼻緒、おろし立ての白足袋、それを見ると、もう其胸は何となく時めいて、其癖何うの彼うのと言ふでもないが、唯嬉しく、そはそはして、其先へ追越すのが何だか惜しいやうな気がする様子。男は此女を既に見知つて居るので、少くとも五六度は其女と同じ電車に乗つたことがある。いや、それどころか、冬の寒い夕暮、わざ／＼廻り路をして其女の家の突留めたことがある。千駄ヶ谷の田舎の西の隅で、樗の木で取囲んだ奥の大きな家、其の総領娘であることをよく知つて居る。眉の美しい、色の白い、頬の豊かな、笑ふ時言ふに言はれぬ表情を其眉と眼との間にあらはす娘だ。

『もう何うしても二十二三、学校に通つて居るのではなし……それは毎朝逢はぬのでも解るが、それにしても何処に行くのだらう』と思つたが、其思つたのが既に愉快なので、眼の前にちらつく美しい衣服の色彩が言ひ知らず胸をそよる。

『もう嫁に行くんだらう?』と続いて思つたが、今度はそれが何だか佻しいやうな惜しいやうな気がして、『己も今少し若ければ……』と二一の矢を継いだが、『何だ馬鹿々々しい、己あ幾歳だ、女房もあれば子供もある』と思返した。思返したが、何となく悲しい、何となくなつかしい、何となく嬉しい。

代々木の停留場に入る階段の処で、それでも追越して、衣ずれの音、白粉の香に胸を躍したが、今回は振り返りもせず、大足に、しかも駈けるやうにして、階段を上つた。

(1) 明治から大正にかけて流行した髪形で、全体をふくらませ、特に前髪を庇のように結つたもの。



図 5

(2) しゆす織の地布に別の横糸で模様を浮き出させた織物。
(3) 一番上の娘。

停留場の駅長が赤い回数切符を切つて返した。此駅長も其他の駅夫も皆な此大男に熟して居る。性急で、慌て者で、早口であるといふことをも知つて居る。

板垣ひの待合所に入らうとして、男はまた其前に兼ねて見知越の女学生の立つて居るのを眼敏くも見た。

肉附きの好い、頬の桃色の、輪廓の丸い、それは可愛い娘だ。派手な縞物に、海老茶の袴を穿いて、右手に女持の細い蝙蝠傘、左の手に、紫の風呂敷包を抱へて居るが、今日はリボンがいつものと違つて白いと男はすぐ思つた。

此娘は自分を忘れは為まい、無論知つてる！と続いて思つた。そして娘の方を見たが、娘は知らぬ顔をして、彼方を向いて居る。あの位の中は耻しいんだらう、と思ふと堪らなく可愛くなつたらしい、見ぬやうな振をして幾度となく見る、頻りに見る。——そしてまた眼を外して、今度は階段の処で追越した女の後姿に見入つた。

電車の来るのも知らぬといふ風。

二

此娘は自分を忘れは為まいと此男が思つたのは、理由のあることで、それには面

(4) よくなれている。

(5) 赤紫がかつた茶色。えびは葡萄の古名。伊勢海老の殻の色から海老の字に変わった。



図 6

白い一小挿話があるのだ。此娘とは何時でも同時刻に代々木から電車に乗つて、牛込まで行くので、以前からよく其姿を見知つて居たが、それと謂つて敢て口を聞かんと謂うのではない。唯相對して乗つて居る、よく肥つた娘だなアと思ふ。あの頬の肉の豊かなこと、乳の大きなこともう立派な娘だなどと続いて思ふ。それが度重なる、笑顔の美しいことも、耳の下に小さい黒子のあることも、混雑した電車の吊皮にすらりとのべた腕の白いことも、信濃町から同じ学校の女学生とをりく選返し蓮葉に会話を交ゆることも、何も彼もよく知るやうになつて、何処の娘かしらん？ などと、其家其家庭が知り度くなる。

でも後をつけるほど氣にも入らなかつたと見えて、敢てそれを知らうとも為なかつたが、ある日のこと、男は例の帽子、例のインベネス、例の背広、例の靴で、例の道を例のごとく千駄谷の田畝に懸つて来ると、不図前から其肥つた娘が、羽織の上に白い前懸をだらしなくしめて、半ば解き懸けた髪を右の手で押へながら、友達らしい娘と何事かを語り合ひながら、歩いて来た。何時も逢ふ顔に違つた処で逢ふと、何だか他人でないやうな氣がするものだが、男もさう思つたと見えて、今少しで会釈を為るやうな態度をして、急いだ歩調をはたと留めた。娘もちらと此方を見て、これも『あゝあの人だな、いつも電車に乗る人だな』と思つたらしかつたが、会釈をする訳もないので、黙つてすれ違つて了つた。男はすれ違ひざまに、『今日は学校に行かぬのかしらん？ さうか、試験休みか、春休みか』と我知らず口に出

(1) 当時 代々木の駅は甲武鉄道と山手線の二線が走つていて、電車だったのは甲武鉄道。

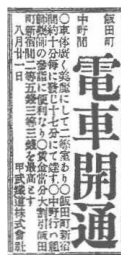


図7

(2) 現在の飯田橋より新宿寄りにあつた駅。明治二十七年一月に甲武鉄道の駅として開業。昭和三年二月に廃止された。

(3) 軽薄なこと。はすっぱ。

して言つて、五六間ほど無意識にてく／＼と歩いて行くと、不図黒い柔かい美しい春の土に、丁度金屏風に銀で画いた松の葉のやうにそつと落ちて居るアルミニウムの留針。

娘のだナと思つた。

突如、振り返つて、大きな声で、『もし、もし、もし』と連呼した。

娘はまだ十間ほど行つたばかりだから、無論此声は耳に入つたのであるが、今すれ違つた大男に声を懸けられるとは思はぬので、振り返りもせずに、友達ともたちの娘むすめと肩かたを並べて静かに語りながら歩いて行く。朝日あさひが美しく野のの農夫のうふの鋤すまうの刃はに光ひかる。

『もし、もし、もし』

と男は顔を押し込んだやうに再び叫んだ。

で、娘も振り返る、見ると先程の男は両手を高く挙げて、此方こつちを向いて面白い恰好おもしろかつかうをして居る。ふと、気が附いて、頭に手を遣ると、留針びんが無い。はつと思つて、『あら、私わたし、嫌いやよ、留針びんを落おとしてよ』と友達に言ふでもなく言つて、其儘そのまゝ、ばたばたと駆け出した。

男は手を挙げたまゝ、其のアルミニウムの留針びんを持つて待つて居る。娘むすめはいきせき駆けて来る。やがて傍そばに近寄つた。

『何なにうどうも有難ありがたう……………』

(4) アルミニウムでできた髪をおさえるピン。

(5) 幅の広い刃に柄をつけた土を掘り起こすための農具。

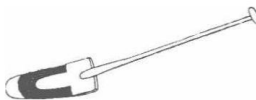


図 8

と、娘は耻しさに顔を赧くして、礼を言った。四角の輪廓をした大きな顔は、さも嬉しさに莞爾々と笑つて、娘の白い美しい手に其の留針を渡した。

『何うも難有う御座いました』

と、再び丁寧に娘は礼を述べて、そして踵を旋した。

男は嬉しくつて仕方が無い。愉快でたまらない。これであの娘、己の顔を見覺たナ……と思ふ。電車でこれから邂逅しても、あの人が私の留針を拾つて呉れた人だと思ふに相違ない。もし己が年が若くつて、娘が今少し別品で、それでかういふ幕を演ずると、面白い小説が出来るんだなどと、取留もないことを種々に考へる。聯想到聯想を生んで、其身の徒らに青年時代を浪費して了つたことや、恋人で娶つた妻君の老いて了つたことや、小児の多いことや、自分の生活の荒涼たることや、時勢に後れて将来に発達の見込のないことや、いろ／＼なことが乱れた糸のやうに、纏れ合つて、こんがらがつて、殆ど際限が無い。ふと、其の勤めて居る某雑誌社のむつかしい編輯長の顔が空想の中に歴々と浮んだ。と、急に空想を捨て、路を急ぎ出した。

三

- (1) 三部屋。
- (2) 細くて群生する笹竹の類。
- (3) 常緑の低木。早春に香りの強い小花が咲く。



図 9

- (4) 縄か竿の先につけて井戸から水を汲むのに使う桶。



図 10

- (5) 水や湯を入れて洗濯物を洗うための円くて平たい器。



図 11

此男は何処から来るかと言ふと、千駄谷の田畝を越して、櫟の並木の向ふを通つて、新建の立派な邸宅の門をつらねて居る間を抜けて、牛の鳴声の聞える牧場、樫の大樹の連つて居る小径——その向ふをだら／＼と下つた丘陵の陰の一軒家、毎朝かれは其処から出て来るので、丈の低い要垣を周りに取廻して、三間位と思はれる家の構造、床の低いのと屋根の低いのを見ても、貸家建ての粗雑な普請であることが解る。小さな門の中に入らなくとも、路から庭や座敷がすつかり見えて、篠竹の五六本生えて居る下に、沈丁花の小さいのが二三株咲いて居るが、其傍には鉢植の花ものが五つ六つだらしく並べられてある。妻君らしい二十五六の女が甲斐々々しく襷掛になつて働いて居ると、四歳位の男の兒と六歳位の女の兒とが、座敷の次の間の椽側の日当りの好い処に出て、頻りに何事をか言つて遊んで居る。

家の南側に、釣瓶の伏せた井戸があるが、十時頃になると、天気さへ好ければ、妻君は其処に盥を持ち出して、頻りに洗濯を遣る。衣を漉ふ水の音がざぶ／＼と長閑に聞えて、隣の白蓮の美しく春の日に光るのが、何とも言へぬ平和な趣をあたりに展げる。妻君は成程もう色は衰へて居るが、娘盛にはこれでも十人並以上であつたらうと思はれる。やゝ旧派の束髪に結つて、ふつくりとした前髪を取つてあるが、衣服は木綿の縞物を着て、海老茶色の帯の末端が地について、帯揚げのところが、洗濯の手を動かす度に、微かに揺く。少時すると、末の男の兒が、かアちゃん／＼と遠くから呼んで来て、傍に来ると、いきなり懐の乳を探つた。まアお待ちよ

(6) ハクモクレン。モクレン科の落葉小高木。庭木とする。春光枝先に香りの良い大きな花を付ける。



図 12

(7) 西洋式の結髪でも時代で変化した。この頃は日露戦争後で「二百三高地」と呼ばれる大きな髷が大流行していた。ここは、最初の頃の比較的小さくまとめた髪型のこと。



図 13

(8) 女性の帯が下がらないように締めるひも。